The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯」補遺
Author(s)	岡崎, 精郎
Citation	懐徳. 1963, 34, p. 56-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯」補遺

岡崎精郎

一

昨年、本誌三三號にニコライ・A・ネフスキ氏に關して調査した結果をまとめて發表したが、その後、拙稿を御覽下さつた方たちから御教示をえて修正を加え、「窓」誌（ナウカ社刊行）本年一號、二・三合併號、五號に分載した。しかし、なおその後もさらに修正の必要をみるにいたつた上に、新資料の提示をもうけ、その一部は前記の修正稿に引用したが、ここに全文を發表して大方の御覽に供したく考えるので、三度び稿をものする次第である。

二

まず最初に、ネフスキ氏の柳田國男氏に宛てられた書翰を轉載する。本書翰は、近畿民俗學會を主宰せられる澤田四郎作博士の所藏にかかるもので、「大白神考」（柳田國男先生著作集第一一卷）にネフスキ氏書翰を集錄された中には入つていない。ここに澤田博士の御許可をえて全文を引用する。同書翰は大正十一年三月一日附で、北海道小樽市綠町二ノ二八より出されており、あたかも同年四月に大阪外國語學校へ轉任される直前で、氏の小樽高商勤務時代の末期のものとして注目される。

「なつかしき先生！

隨分御無沙汰しました　誠に申譯が御座いません

東京は今春らしくなりましたでせうと思ふと　羨まずにはゐられません　當地はまだ雪一ッぱいで　おまけに此頃は毎日の吹雪の外　寒さがひどく身體を占領して再びの寒中の感じを與へて居ります

扨て先日は御親切なお葉書や御書簡を戴き　且つ又昨日「宮古の研究」を正に落手致しまして　何よりも難有く存じて居ります

御手紙に對しては早速御返事を差しあげなければな

らない筈でしたが　此頃は一寸忙しかつたのですから
こんなに延引してしまひました　何卒あしからず思召
し下さい　何で忙しかつたかと云ふと　二週間も前か
ら二人の老メノコが來て家に止まつて居りましたから
　毎日毎日色々の話やユカラを筆記して居りました
その婆様達は漸くさきおととひ歸りました　彼女らの
滯在中は色々のユカラ（只のユカラ、メノコユカラ、
カムイユカラ）だのウエペケレだのウパシクマらを蒐
集して置きました　此度は金田一様の御教示を受けて
ポツポツ飜譯して見たいと思ひます
　宮古語に就ては先生の御意見を承はりたい　家へ歸
つてから東京で取つた材料を能く調べて見ると　中々
不完全な感じを與へます　第一 Phonetic に就いては
色々の不足點があります　Morphologie になります
とそう云ふ不足點が數へ切れない程澤山御座います
小生に取つては一番憂ふべき事は　大事な動詞の活用
變化を完全にあらはす事の出來ないのと　テニヲハの
使ひ方は十分に述べつくす事の出來ないのとであります
　小生は御承知の通り一週間しか宮古人に接した事
が御座いませんし　且又一人にしかあつた事が御座い
ませんから　廣い意味に於ての文法を聞き得る事が出
來ないのは當然の事であります　人間といふものには
話しする時に色々の癖があつて　一人はこう云ふ活用
變化を使ひ　他は他の變化を用ゐるのであります　即
ち人に依つては右の癖が違ふ譯なんです　家へ歸つて
　集めた材料を整理するにかかると始めて右〔に〕述
べた事が訣ります　それから小生の接した所の宮古人
の發音はどれ程標準になつてゐるか　それもやはり一
つの問題になつて居ります
　若しも不完全なものでもよろしければ　一種の「宮
古語研究材料」として書いても宜しい
　夏休みには是非とも宮古へ行つてそこで研究を繼續
したいと思ひますから　今はあんまり書きたくは御座
いません　とにかく右の事に就ては御意見を承はりた
いと思つて居ります
　末筆ながらなつかしき先生の御健康を祈つて居りま
す
　御一同様を始め皆様にもよろしく御傳言の程御願ひ
致します
　先は右お禮旁々御依賴而已
　三月一日　　ねふすき　　敬具
柳田先生
侍史

右書翰はネフスキ氏のユーカラ研究ならびに宮古語研究の進行狀況をうかがう上に重要と考えるので、あえて全文を掲載するものである。後年、宮古うた六〇篇に關する研究論文としてまとめられ、また「アイヌの民間傳承」（ロシア文）として一九三五年公けにせられたものも、いずれも早くから着手せられていたわけであるが、それら後年における研究成果については前掲拙稿にふれたところに讓る。

三

次に、「窓」誌にのせた修正稿以後にみ出した修正箇所を列記する。以下、便宜のため、「懷德」誌昨年號の拙稿を懷と略稱し、「窓」誌の修正稿を窓と略記する。

(1)柳田國男氏御宅における萬葉集研究會のこと（懷六三頁、窓一號五頁）。同研究會に岡正雄氏が一九一五・一六年當時より參加せられた旨を長谷川幾久雄氏「私の蒐集遍歷」に基いて記したが、岡氏が同研究會に出席し始められたのは昭和十三年二月からのことである（本年七月三一日附、岡正雄教授の筆者宛御來信による）。

(2)ネフスキ氏論文「相模の獅子舞の歌」のこと（懷六四頁・窓一號六頁）。この歌を神奈川縣津久井郡島屋村としたのは誤で、近鄕の出身である京大大學院、若松寛氏の御示教によつて同郡鳥屋（とや）村（現在は町村合併により變更あり）に改めるべきである。

(3)一九二五年夏、ネフスキ氏は北京に赴き、王國維氏に面會されてより云々の記事（懷六六頁・窓一號七頁）。ネフスキ氏「王靜安先生を訪ねて」（藝文一八卷八號、昭和二年八月刊、五八―九頁）の一文は舊稿二篇に何れも落しているが、同稿は、北京に赴かれたネフスキ氏が王國維氏を私宅に訪ねながら、わずかの差で面會され得なかつた事情をのべて、遺憾の意をのべられたものである。なお、同誌同號にのせられた石濱純太郎博士「靜安學社」（同號六五頁）には、王國維氏（靜安）に因む靜安學社の命名がネフスキ氏の首唱によるものであつた旨を敍べておられる。

四

ネフスキ氏は歸國に際して、それまで書きためられた、厖大なノート類・カード類を日本に殘されたが、それが種々の經過をへて、昨秋天理圖書館の所藏に歸したことはまさしく學界の快事であつた。目下調査をすすめているが、若し許されるならば、その內容を發表する機會をえたいものと考えている。（昭和三八年八月一五日稿）